

香芝の古代史の謎を探る②

葛城氏が生んだ

最後の大王たち

塚口 義信

◆ 顕宗・武烈天皇の虚像と実像

香芝市に住んでおられる人であれば、一度は顕宗・武烈天皇の名を耳にされたことがあるでしょう。それは両天皇の陵墓が、香芝市にあるとされているからです。顕宗天皇のそれは北今市に、武烈天皇のそれは今泉にあるとされています。もちろん、現在宮内庁によって管理されている古墳や古墳らしきものが、実際に両天皇の陵墓であるかどうかということになると、たやすくこれを信じるわけにはいきません。なぜなら、そう考えるべき根拠がないからです。私見によれば、前号（第四号）で述べたように、武烈陵は狐井城山古墳である可能性が強いと思われるのですが、顕宗陵の方は残念ながら、よくわかりません。どうか皆様方も一度推理してみてください。

それはともかく、顕宗・武烈天皇は一体、どのような天皇であったのでしょうか。今回は、両天皇の実像に迫ってみたいと思います。

まず、時代的に新しい武烈天皇からみていきます。

武烈天皇は日本一の暴君か

◆「日本書紀」にみる武烈天皇像

わが国最古の古典として有名な「古事記」「日本書紀」(「記」「紀」と略す場合もあります)によると、武烈天皇は第二十五代の天皇とされています。もちろん、この代数は初代の神武天皇から数えた代数であり、あまり当てにはなりません。在位は四九九年〜五〇七年までとされていますが、これも信用できるかどうかは疑わしく、あくまでも一つの目安として受け

取っておくべきでしょう。

さて、「日本書紀」によると、この武烈天皇は歴代の天皇のなかで、最も暴君であったと伝えられています。次に、その暴君ぶりを示す記事のいくつかを掲げてみましょう。

又頻に諸悪を造たまふ。一も善を修めたまはず。凡そ諸の酷刑、親ら覽はさずといふこと無し。國の内の居人、咸に皆震ひ怖づ。(また、しきりに多くの悪業をなさつて、一つも善業を行われな

かった。およそ、さまざまな酷刑を親しくご覧にならないということはなかった。

国内の人民たちは、ことごとく震え怖れていた。)

二年の秋九月に、孕める婦の腹を刺きて、其の胎を觀す。(二年の秋九月に、妊婦の腹を割いて、その胎児をご覧になった。)

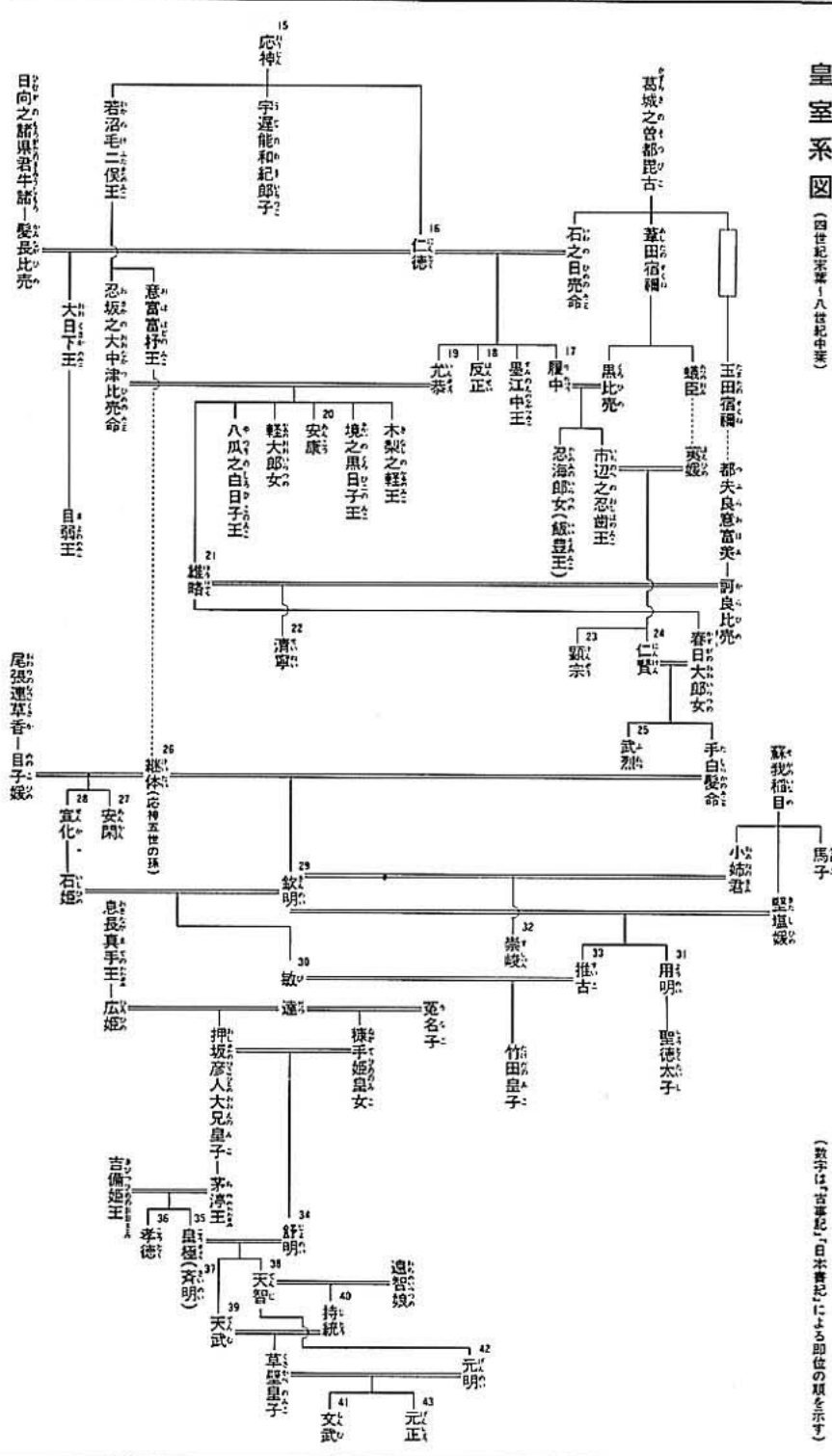
三年の冬十月に、人の指甲を解きて、累預を揺らしむ。(三年の冬十月に、人のなま爪を抜いて、いもを揺らせた。)

四年の夏四月に、人の頭の髪を抜きて、樹の巔に昇らしむ。樹の本を斫り倒して、昇れる者を落し死すを快とす。(四年の夏四月に、人の頭髪を抜いて、樹の尖端に昇らせ、樹の本を斬り倒して、昇っている者を落し殺すのを楽しみとされた。)

五年の夏六月に、人をして塘の械に伏せ入らしむ。外に流れ出づるを、三刃の矛を持ちて、刺し殺すことを快とす。(五年の夏六月に、人を池の樋に伏せ入らせ、外に流れ出てくるところを、三刃の矛で刺し殺すことを楽しみとされた。)

七年の春二月に、人をして樹に昇らしめて、弓を以て射殺して笑ふ。(七年の春二月に、人を樹に登らせて、弓で射落して笑われた。)

皇室系図 (四世紀末葉〜八世紀中葉)



(数字は「古事記」「日本書紀」による即位の順を示す)

◆ねつ造された露盧記事

「日本書紀」が記すように、本当に武烈天皇は悪逆無道の天皇であったのでしょうか。

答えは「否」です。なぜなら、そのように伝えているのは「日本書紀」だけで、この書物より八年前の七二二年に成立した「古事記」の方には、全くそのような



今泉にある「武烈天皇陵」

記事がみえていないからです。

現在の学界では、「記」「紀」両書に記されている歴代天皇の系譜や事績は、ともに欽明朝（六世紀中葉）に成書化された「帝紀」に依拠して書かれたものだが、右に掲げたような、語句の出典の多くが中国史書にみられ、かつ、「古事記」に伝えられていないような記事は、「日本書紀」の編述者たちによって机上で述作された可能性が強い、と考えられています。私も、そうした考え方に賛成です。おそらく津田左右吉氏が説かれたように、「日本書紀」の編述者たちが中国（儒教）の政治道徳の思想に基づき、武烈天皇を「不徳の君主」、すなわち暴君に仕立て上げたものにすぎないと考えられます。

では、なにゆえ「日本書紀」の編述者たちは、武烈天皇を悪者に仕立て上げる必要があったのでしょうか。

「日本書紀」という書物は、天武朝から編纂が始められ、持統・文武・元明天皇の各時代を経て、やがて元正女帝の養老四年に完成したものです。それは、編纂が開始された天武十（六八一）年より、じつに三十九年間もかかって編纂されたものなのです。

ところで、ここで興味深いことは、「日本書紀」の編纂を行った天皇たちがいずれも、継体天皇を直接の祖とし、武烈天皇とは皇統が異なっていたことです。したがって「日本書紀」の編述者たちは、継体天皇をよくみせる必要がありました。では、編述者たちはどのようにしたのでしょうか。

その最も効果的な方法は、継体天皇を名君として叙述するとともに、その前で皇統が絶えた武烈天皇を悪者に仕立て上げることです。おそらく「日本書紀」の編述者たちは、仁徳天皇を中国史書にみえる堯・舜のような聖帝に見立てる一方、子孫の絶えた、したがって継体とは皇統の異なる武烈を、これまた子孫の絶えた桀・紂のような暴君に見立てたのではないかと推測されます。「日本書紀」の編述者たちが範として仰いでいた中国には、不徳の君主は国を滅ぼし、子孫も絶える、という考え方があったからです。

◆武烈天皇の実像

では、武烈天皇は、本当はどのような天皇であつたのでしょうか。この点を明らかにすることは容易ではありませんが、全く何の手がかりもないわけではありません。

前述したように、「記」「紀」両書がともに語っている部分は、六世紀中葉の欽明朝に成書化された「原帝紀」に淵源をもつ「帝紀」に依拠して書かれたものと考えられます。してみると、武烈天皇の時代は「原帝紀」の編述者たちからみれば、ほんの一、二世代前のことですから、武烈天皇に関する「原帝紀」の内容が全く荒唐無稽であつたとは、とても考えられません。一、二世代前といえは、十分、歴史認識の可能な時代であつたからです。このようにみえてくると、「原帝紀」に記されていたと考えられる次の部分は、後代の造作ではなく、おそらく事実であつ

たどみてよいでしょう。

(一) 武烈天皇が仁賢天皇と春日大郎女(「紀」に春日大娘皇女)との間に生まれ、同母兄弟姉妹に手白髪命(「紀」に手白香皇女)や久須毘郎女(「紀」に檜氷皇女)、橘之中比売命(「紀」に橘皇女)、真若王(「紀」に真稚皇女)などがいたこと。

(二) 武烈天皇の名がヲハツセノワカサザキノミコト(「記」に小長谷若雀命)に小泊瀬稚鷯(「紀」に泊瀬列城宮)であつたこと。(ちなみに、武烈という名は漢風諱号といひ、奈良時代に付けられたものです。)

(三) 長谷の列木宮(「紀」に泊瀬列城宮)で天下を統治したこと。
(四) 太子がいなかったこと。



弟・袁祁王(のちの顕宗天皇)の言葉
「われこそは、天下をお治めになった履中天皇の皇子の、市辺之忍齒王の子ともですぞ。」



兄・意祁王(のちの仁賢天皇)の言葉
「あなたが私たちの名を明らかにしなかったならば、天皇になれるというようなことはなかったでしょう。だから、私は兄ではありますが、やはりあなたが先に天下をお治めください。」



兄・意祁王の言葉
「亡き雄略天皇は父の怨敵ではありますが、私たちのオジでありますし、また天下をお治めになった天皇でもあります。このような人の御陵を壊したならば、きっと後世の人たちは私たちが非難するに違いありません。それゆえ、御陵の傍らを少し掘るとどめました。これで十分でしょう。」

(五) 子代もしくは名代として小長谷部(「紀」に小泊瀬舎人)を定めたこと。

(六) 奥津城は片岡の石坏岡(「紀」に傍丘磐杯丘陵)に営まれたこと。

謎に包まれた顕宗天皇

◆「古事記」にみる顕宗天皇像

顕宗天皇は武烈天皇の叔父で、第二十三代の天皇とされている人ですが、「古事記」によると、即位するに至つたいきさつは、およそ次のようであつたといえます。

五世紀の後半、皇位継承をめぐる争いが激化し、大長谷若雀命(のちの雄略天皇)に父の市辺之押齒王を殺された意祁・袁祁二王(のちの仁賢・顕宗天皇)は、難を逃れ、播磨国(兵庫県)で馬飼・牛飼となつて暮らしていた。一方、ヤマトの朝廷では雄略天皇のあと、皇子の清寧天皇が即位したが、子供がいなかったため、清寧逝去後は、忍齒王の妹の忍海郎女が葛城忍海の高木角刺宮で政治をとつていた。

このとき、山部連小楯が播磨国の「幸」(のちの国司)に任せられ、志自牟の家の新築祝いの酒宴に臨席した。酒もたけなわになつたころ、庵のそばにいた「火焼き小子」(火を焚く役にあつた少年)二人が舞うことを命じられた。兄の方から先に舞つたが、弟の袁祁王は舞おうとしたとき、吟

詠して、自分が履中天皇皇子の忍齒王の子であることを名のつた。これを聞いた小楯連は、驚いて、二王を仮宮に住まわせるとともに、忍海郎女のもとに急使を派遣した。忍海郎女は知らせを聞いて、たいへんよろこび、二王を角刺宮によびよせた。そのうち、二王は皇位につくことをゆずり合つたが、名のりをしたというゆえをもつて、弟の袁祁王が先に即位した。これが顕宗天皇である。

二王が、弟の名のりによって忍南王の子であることがわかり、やがて大和に上つて顕宗・仁賢天皇として即位した、という点は同じです。はたしてこれは、事実なのでしょうか。

◆つづられた顕宗天皇像

「馬甘・牛甘」(馬飼・牛飼)から「天皇」になったとする「古事記」の伝承は、はたして事実でしょうか。多くの研究者が一致して説くところによると、この物語は口誦伝承の世界における王胤出現譚もしくは貴種流離譚の類型に属するものであって、とうていそのまま事実とは認めがたいということ。私も、おそらくそのような誤りないと考えています。では、なぜ「古事記」や「日本書紀」にこのようなおとぎ話めいた物語が記されているのでしょうか。この疑問を解くカギは、見つけ出された二王がたがいに皇位をゆずり合った、とされている点にありそうです。儒教思想によると、こうした行為は有徳の表徴であり、したがって顕宗・仁賢両天皇は徳の高い君主であった、と考えられていたということ。すなわち、じつは、皇位をゆずり合ったのちに即位したとされている天皇が、もう一人います。それは仁徳天皇です。「古事記」や「日本書紀」は、仁徳天皇の時代を「聖帝の世」としてほめたたえていますので、仁徳天皇もまた、非常に徳の高い天皇であったとされているのです。

このような、仁徳天皇や顕宗・仁賢天皇を「有徳の天皇」とする思想は、どこから醸成されてきたものなのでしょうか。

結論的にいえば、私は、それは「記」「紀」の編述者たちが原史料として用いた「帝紀」のもととなった書物、すなわち欽明朝に成書化された「原帝紀」の思想を受け継いだものであると考えています。

そもそも、欽明の朝廷で「原帝紀」が成書化された最大の理由は、欽明系王統の正統性を説くことにありました。当時の王室内には、継体・安閑・宣化系王統と欽明系王統との対立があり、欽明天皇はその即位の正当性と出自の正統性を証明するために、「原帝紀」の編纂を思い立ったのです。だからこそ、比較的「原帝紀」の思想に近いとされている「古事記」下巻の皇位継承に関する物語を読んでみると、欽明系王統に属する人たちは良く書かれ、継体・安閑・宣化系王統に属する人たちは悪く書かれているのです(下記参照)。したがって、「古事記」下巻の皇位継承に関する物語は、「聖帝仁徳に始まり君子仁賢を経て、王権の正統な後継者たる手白髪命所生の欽明の即位に終るところの、履中系の立場による対允恭系の物語」として、読むべきだと思われまふ。

このようにみえてくると、仁徳天皇や顕宗・仁賢天皇が有徳の君主として書かれているのは、「原帝紀」の思想の然らしめるところであって、はたして実際にそうであったかどうかは疑わしい、という結論に落ち着かざるを得ないでしょう。

では、顕宗天皇は一体、どのような人であったのでしょうか。この点は紙幅の関係で、またべつに機会に、あらためて論じたいと思います。

(堺女子短期大学教授・文学博士)

「古事記」下巻に見える皇位継承の伝承

(大夜命(のちの仁徳)と宇遲能(和紀)皇子はたがい王位をゆずり合うほど仲のよい兄弟であったが、和紀皇子が天逝したので、仁徳が即位した。(原帝紀))

一、仁徳は高い山に登って四方の国を望み、国になかみかたがたたないのを見て、三年の間、讓位を免じた。その結果、人民は富み栄え、夫役を苦しむこともなかつた。それゆゑ、その御世をほめたたえて、「聖帝の世」というのである。(仁徳紀)

二、仁徳のあとを受け継いだ履中の世に、黒江中王が反乱を起こしたが、幸いにも弟の水南別命(のちの反正)が忠誠で、機知によってこれを鎮めてくれた。(履中紀)

三、反正のあとには忍坂之大中津比売命の強い要請によって病弱な允恭が即位したが、この二人の間に生まれた子供たちは、みな暗愚もしくは暴虐であった。允恭の前後、太子の木梨之輕王は同母妹の輕大即女と密通したため、百官および万民は太子をすてて六穂皇子(のちの安閑)に擁した。恐れれた太子は前小前宿禰大臣の家に逃げ込んだが、大臣は六穂皇子に向かつて、「我が天皇の御子、いろ兄の王に兵をな及りたまひ。若し兵を及りたまはば、必ず人喚はむ。僕捕へて貢進らむ」と言い、輕王を差し出した。輕王は伊余湯(松山市の道後温泉)に配流され、やがて大即女とともに命を断つた。(允恭紀)

四、それで、允恭のあとには安閑が即位したが、安閑は愚かにも根拠の謠言を言じて大即女を殺し、みずから大即女の子の目弱王によって殺された。そこで、弟の大長谷王(のちの雄略)は、天皇が殺されても平然としている同母兄の境之黒日子王と八瓜之白日子王を殺すとともに、目弱王や彼に荷担した葛城の都夫良意富美を討つた。そのとき都夫良意富美は、「先の日御(神武)は、神皇比売は侍はむ。亦五妃の屯を誦へて赦らむ。然るに其の正身奉向はざる所は、往古より今時に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞けど、未だ王子の臣の家に隠りませることはいかす。是を以て思うに、賤しき奴意富美は、力をつくして腹ふとも、更に勝つべきこと無けむ。然れども已をたのみてやしき家に入り坐し王子は、死ぬとも棄てまつらじ」と言い、まことにあつぱれな態度を示したという。

この大長谷王は、市辺之忍南王を引き連れて狩

に出かけ、卑劣にも多綿の蚊野で忍南王を吹き殺し、遺骸を馬の飼葉桶に入れて、地面と同じ高さにして埋めた。(安閑紀)

五、忍南王の二王子、意那王(のちの仁賢)・意那王(のちの顕宗)は難を逃れて播磨国で馬飼・牛飼となつて暮らしていたが、清和の崩後、忍南王の妹の忍海郎女の後押しで即位し、履中系の王統を回復した。

意那・意那二王はたがい王位をゆずり合ったが、「針間の志自半が家に住みし時、汝命を顕ざりせば、更に天下しらす君に非ざらまし。是れ既に汝命の功なり。故、吾は兄なれども猶汝命先に天下を治めたまへ」という兄の優しい言葉に断り切れず、弟の意那王が先に即位した。(清和紀)

六、顕宗は父の遺骸を捜し当て、蚊野の東の山に御陵を通り、それを手厚く葬つた。顕宗が報復のために父を殺した雄略の御陵を破壊せよとしたりと、意那王はみずからこの役を買って、御陵の傍らを少し掘るにとめた。顕宗が意那王にその理由を聞いたとき、意那王は、「然るに所以は、父王の怨を其の靈に報ひむと欲するは、是れ誠に理なり。然れども其の大長谷天皇は父の怨にはませども、還りて我が從父に爲し、亦天下治たまひし天皇なり。是に今ひとへに父の仇といふ志を取りて、悉に天下治たまひし天皇の陵を破りなば、後の人必ず誹謗らむ。唯父王の仇は報いざるべからず。故、少しく其の陵の辺を掘り、既に是の恥を以て後の世に示すに足りなむ」と説き、顕宗もまたこの言葉に感服した。顕宗が亡くなると、ただちに意那王が即位して、天下を統治した。(顕宗紀)

七、武烈の崩後、王位を継ぐべき皇子がいなかったため、近江国より神代五世の孫の真木舒命(のちの継体)を上京させ、仁賢皇女の手白髪命にめあわせて、天下を授けた。(武烈紀)

八、継体には多くの皇子女がいたが、そのうちの欽明・安閑宣化が即位し、師木島大宮・勾之金宮宮・松岡之屋入野宮で、それぞれ天下を統治した。(継体紀・欽明紀) 欽明の治天下の記事が先に記されていることと、その宮居が「大宮」の称をもつて呼ばれていることに注目されたい。

ここに叙述されている物語は、仁徳・履中・反正・顕宗・仁賢・欽明系の王統を是とし、允恭・安閑・雄略・継体・安閑・宣化系の王統を非とする思想的立場によつてつらぬかれている。